

平成 28 年 9 月 20 日

箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス中央図書館前南地点 記者発表資料

九州大学埋蔵文化財調査室

所在地 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学箱崎キャンパス
中央図書館地区・中央図書館前南地点 (図 1・2)

調査面積 約 120 m²

調査年月日 平成 28 年 8 月 22 日～10 月 14 日 (予定)

*平成 28 年 9 月 21 日 (水) 14:00～16:00 に現地にて説明会を開催します。

1. 調査の経緯

九州大学では、統合移転推進事業にともない箱崎キャンパスの埋蔵文化財調査を進めています。箱崎キャンパスは、^{はこぎきぐう}箱崎宮の創建以降に形成された都市・集落一箱崎遺跡の一部にあたり、これまでの調査により、古代末～近世の遺構や遺物の存在が確認されています。また、北に接する地点には史跡元寇防塁(地蔵松原地区)があり、この延長線上に位置する箱崎キャンパス内を南北に貫くかたちで元寇防塁が築かれたと指摘されてきました(中山 1914)。平成 28 年度上半期は、旧理学部 2 号館前南地点(530 m²)、中央図書館前南地点(120 m²)の発掘調査を行っています。

旧理学部 2 号館前南地点の調査では、砂丘列 2 列の間から溝(幅 14m、深さ 1.5m)、土坑 2 基などが検出されました。溝からは、龍泉窯系・同安窯系青磁、朝鮮王朝象嵌陶磁などの貿易陶磁器、土師器、須恵器、土錘・石錘などが出土しています。12～16 世紀を主体とする時期に形成された遺物包含層です。また、調査区内の海側の砂丘頂部では、こぶし大～人頭大の泥岩礫群の集中が確認されました。これらは、石積み遺構を築造する際によく用いられる礫(裏込石)が散在したものと考えられます。

本調査中に、旧理学部本館と中央図書館との間を走る舗装路でガス配管の切替え工事が行われ、大型の礫 2 点が並んで発見されました。また周囲には、旧理学部 2 号館前南地点で見つかったものと同様の礫群が散在していました。ここは、史跡元寇防塁(地蔵松原地区)と旧理学部 2 号館前南地点での裏込石の集中地点とを結ぶ地点にあたります。この付近に、元寇防塁の一部が良好な状態で保存されている可能性があります。そこで、発見された大型礫群が北側に向かって連なり、列をなすのかを確認するため、中央図書館南側の空闲地で発掘調査を行いました。

2. 発掘調査の成果 一南北に延びる石積み遺構の発見一 (写真 1・2・3・4)

今回調査したのは、箱崎キャンパスの中央図書館南側の 2 地点です。防音講義室に接する調査区(西地区)で掘り下げを行ったところ、地表下約 1.3m で大型の角礫が、南北 17m 以上にわたって整然と並ぶことが判明しました。

基底石とみられる 40～70 cm大の角礫が、博多湾側に面を揃えて 20 石以上、直線的に並びます。これらは、もともとの位置からほとんど動いていません。大型石材の西側の面を丁寧^{ていねい}に加工し、平坦面が作られています。あいだに角礫を詰め込み、石材を 3 段ほど積み上げた部分も一部に残っています。現存する遺構の高さは約 0.9m を測ります。また、石積みから約 2 m の範囲内からは、こぶし大～人頭大に砕かれた石片が多数見つかりました。これは、積み重ねた大型礫群の隙間を充填した裏込石であり、後代の人為攪拌や樹木根による攪拌の影響を受けて、もともとあった位置から散乱したものとみられます。大型の角礫には主に礫岩^{れきがん}、裏込石には礫岩^{れきがん}・砂岩^{さがん}が用いられています。なお、周辺から土師器や陶磁器の破片が少量発見されていますが、この遺構にともなうといえる出土状況にはありませんでした。そのため、出土遺物から遺構の築造時期を特定することは、まだ難しいところです。

今回発見された遺構は、場所や構築方法から、文永の役^{ぶんえい}（1274 年）の後、再度の蒙古襲来に備えて薩摩国が造営分担したとされる元寇防塁の一部である可能性が高いと考えられます。元寇防塁であるとすれば、国内に残る類例のなかでも残存状況が非常に良好です。学術的価値も高く、構築方法や築造分担の特色を把握できる可能性を秘めています。全貌を明らかにするためには、今後さらなる追跡調査と検討を進めなければなりません。

3. 箱崎地区の元寇防塁について

元寇防塁は、文永 11（1274）年の蒙古襲来（文永の役）の後に鎌倉幕府の命により、九州各国の分担で博多湾岸に総延長約 20 km にわたって築造されました（図 3）。高さ約 2～3 m（諸説あり）の石築地^{いしついで}です。今津地区は大隅・日向国、長垂地区は豊前国、生の松原地区は肥後国、姪浜地区は肥前国、博多地区は筑前・筑後国、箱崎地区は薩摩国、香椎地区は豊前国が、領主の所領に応じて割り当てられた範囲を分担しました。昭和 6 年 3 月 30 日、今津、今山、長垂、生の松原、向浜、脇、百道、西新、地行、地藏松原の 10 地区が国史跡に指定されました。昭和 56 年 3 月 16 日に今津地区の一部が追加指定されました。

石堂川（御笠川）と多々良川の河口を結ぶ約 3 km の箱崎地区を、薩摩国が築造分担しました。元寇防塁の築造は、建治 2（1276）年 3 月ごろから始まり、同年 8 月には一応の完成をみたとされていますが、箱崎地区の場合、建治 3（1277）年や弘安 7（1284）年に石築地を築造したという史料があり、建治 2 年には全部が完成せず、築造が継続したと言われています。元寇防塁の位置については、中山平次郎・元九州大学医学部教授が、九州大学医学部構内（グラウンド横）から箱崎網屋の墓地、九州大学旧工学部、農学部構内を貫いて地藏松原墓地にいたる微高地上に立地すると述べています（中山 1914）。また、那珂川の河口東岸から多々良川の河口までの区間は、防塁が嚴重に築かれた可能性があります（大塚 2013）。

史跡元寇防塁（地藏松原地区）では、大正 9 年に全長約 8 m の範囲^{たけやみずき}を武谷水城氏が発掘調査しています。石列高は 60.6～106.1 cm、石列幅は 60.6～72.7 cm、石材は大きいもので幅 84.8 cm、高さ 30.3 cm、厚さ 45.5 cm と報告されています（武谷 1922）（写真 5）。平成 5 年には九州大学農学部演習農場（地藏松原防塁）、平成 12 年には JR 鹿児島本線軌道下（元寇

防塁跡第9次調査)で、福岡市教育委員会が発掘調査をおこなっており、ともに防塁の一部とみられる礫が散布する状況が確認されています(図4)。

参考文献 (五十音順)

- 井上繭子 2008「博多の元寇防塁」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎(編)『中世都市・博多を掘る』海鳥社, 48-51頁
- 榎本義嗣 2008「箱崎」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎(編)『中世都市・博多を掘る』海鳥社, 52-55頁
- 大塚紀宜 2013「元寇防塁と博多湾一防塁の構造とその戦略的機能について」『新修 福岡市史—特別編』自然と遺跡からみた福岡の歴史 福岡市, 302-317頁
- 武谷水城 1921「多々良以東元寇防塁有無に就て 附香椎発掘の石塁」『筑紫史談』第24集 筑紫史談会, 32-41頁
- 武谷水城 1922「多々良以東元寇防塁有無に就ての補足 香椎発掘の石土混塁と地蔵松原発掘の石塁」『筑紫史談』第25集 筑紫史談会, 33-36頁
- 中山平次郎 1914「宮崎の防塁」『筑前史談会講演集』第1輯 筑前史談会, 51-79頁
- 福岡市教育委員会埋蔵文化財課(編)2000「0035 元寇防塁跡第9次調査(GKB-9)」『福岡市埋蔵文化財年報 VOL.15 平成12(2000)年度版』福岡市教育委員会埋蔵文化財課, 52-54頁
- 柳田純孝 1988「元寇防塁と中世の海岸線」川添昭二(編)『よみがえる中世1』東アジアの国際都市 博多 平凡社, 180-194頁



図1 調査地点の位置 (S=1/25,000)

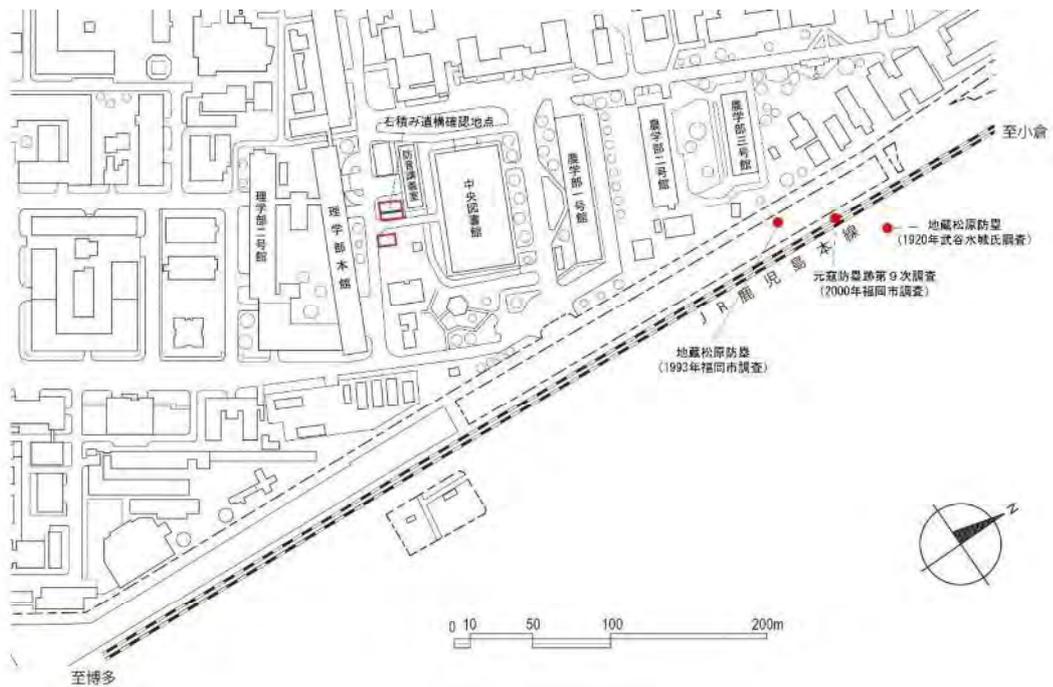


図2 調査地点の位置と石積み遺構の確認地点



写真1 石積み遺構検出状況（北東から）



写真2 石積み遺構検出状況（北から）



写真3 北側拡張区石積み遺構検出状況（南西から）



写真4 石積み遺構細部の状況（北西から）



図3 元寇防塁の位置と調査地点（井上 2008 を一部改変）



写真5 地藏松原における元寇防塁検出状況（大正9年）（武谷 1921）

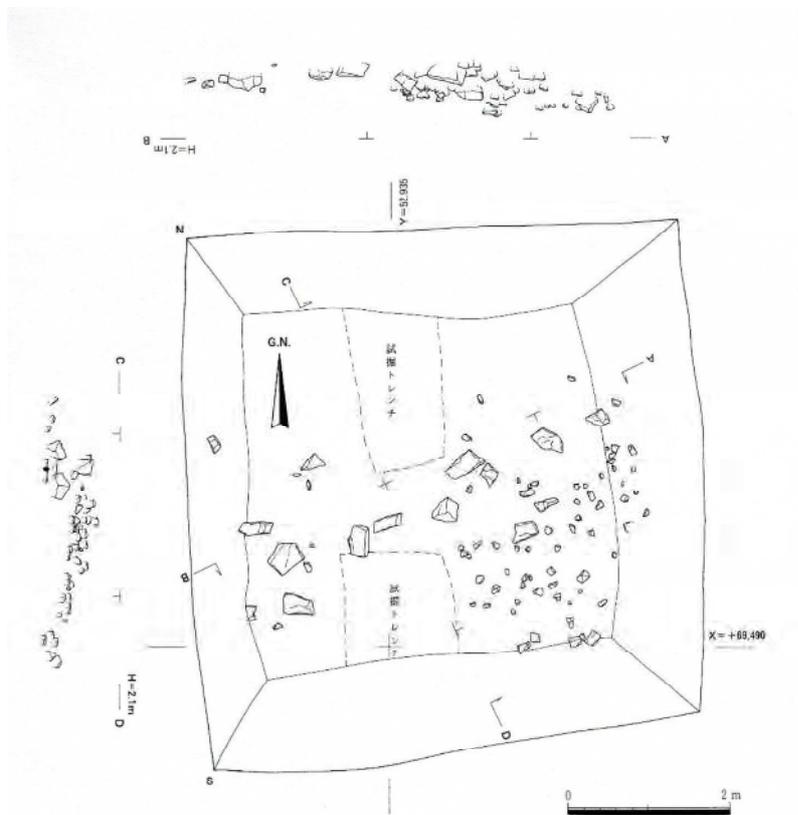


図4 元寇防塁跡第9次調査 調査区平面図 (S=1/80)
 (福岡市教育委員会埋蔵文化財課編 2000)



図5 『蒙古襲来絵詞』に描かれた生の松原の石築地 (宮内庁三の丸尚蔵館蔵)

平成 29 年 6 月 26 日

箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス理学部中庭地点 記者発表資料

九州大学埋蔵文化財調査室

所在地 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学箱崎キャンパス
理学部中庭地点 (図 1・2) 【遺跡略号：HZK1701 地点】

調査面積 6 調査区、計約 800 m²

調査年月日 平成 29 年 5 月 8 日～6 月 30 日 (予定)

1. 調査の経緯

九州大学では、統合移転推進事業にともなう箱崎キャンパスの埋蔵文化財調査を進めています。箱崎キャンパスは、^{（箱崎宮）}箱崎宮の創建（延喜 21（921）年）以降に形成された都市・集落—箱崎遺跡の一部にあたり、これまでの調査により、古代末から近世にかけての遺構や遺物が確認されています。また、キャンパスの北側に接する地点には国指定史跡元寇防塁（地蔵松原地区）があり、この延長線上に位置する箱崎キャンパス内を南北に貫くかたちで元寇防塁が立地していたと推測されてきました（中山 1913a）。

昨年度は、旧理学部 2 号館前南地点（HZK1601 地点：530 m²）、中央図書館前南地点 1 次（HZK1603 地点：120 m²）、2 次（HZK1604 地点：170 m²）の発掘調査を行いました。

昨年 8～10 月に行った中央図書館前南地点 1 次調査で、南北方向 17m 以上にのびる石積み遺構が確認されました。一番下段の部分とみられる石材が 23 石以上、西側（博多湾側）に面を揃えて並んでいました。もっとも良好に保存されていた部分では、石材が 3 段積まれた状態で、高さ約 0.9m 残っていました。

九州大学埋蔵文化財調査室は、石積みの位置関係、立地環境、構築された時期と方法、出土遺物の特徴などを総合的に調査・分析してきました。その結果、この石積み遺構は、建治 2（1276）年頃から博多湾沿岸に築かれた元寇防塁である可能性がきわめて高いと考えています（九州大学埋蔵文化財調査室 2016a・b）。

今回の調査では、石積み遺構が立地する土層堆積環境や走行方向、機能、他地区で発見されている元寇防塁との違いを追究するため、昨年度に発見された石積みの南側延長線上にあたる地区において東西に複数の調査区を設定し、発掘調査を行いました（図 4）。

2. 理学部中庭地点の発掘調査成果

今回の調査では、中央図書館前南地点 1 次調査で昨年発見された石積み遺構から南に約 60 m の地点（Ⅱ区）において、その続きが新たに見つかりました（写真 1）。

石積み遺構は地表下約 0.7m で確認され、南北方向 5 m 以上にわたり直線的にのびます。石積みは、一番下段の部分とみられる石材が途切れながらも、約 7 石並びます。石材は、礫岩・砂岩が用いられ、これまでの調査で出土した石積みのもものと類似します。旧理学部校舎の基礎工事などによる破壊を受けており、2 段目以上は残っていません。石材の大きさはバラツキがありますが、大きなもので幅 75 cm、高さ 50 cm を測ります。石積みの背部（東側）

を調査したところ、^{ひんてい}浜堤の上部を整地して、砂により土盛りした後に、最下段の石材を並べたことがわかりました。

石積み遺構は、博多湾に沿って南北方向に走る浜堤の最上位付近（標高 2.0～2.1m）に築かれています。浜堤は、海側にむかってゆるやかに傾斜しています（写真 2）。土層調査の結果、当時の汀線は、石積みの前面から西へ 20～30m 先にあったことが、わかりました。

石積みから旧汀線までの浜辺には、摩耗して細片化した遺物、貝類が多く混じる粗砂層が堆積しています。調査地点は多々良川の河口に位置する砂州の浜辺にあたるため、これは、多々良川河口域で河川氾濫などにより崩壊した遺跡から博多湾に流出した遺物群が、当時の浜辺に打ち寄せられた堆積物であると考えられます。さらにその下部からは、12 世紀後半以前の貿易陶磁器（龍泉窯系青磁・白磁など）、土器、石器などが多量に出土しています。浜堤が形成される以前に、砂州を発達させた土砂が堆積しています。堆積物下部に含まれる遺物は、この自然堆積にともない、近隣の遺跡から流れ込み、溜まったものです。

石積みの背部は、砂を盛り、陸側にむかってゆるやかに傾斜させています。これは、「^{うら}裏加佐」とよばれる、陸側から元寇防塁背部に登りやすくするための整地部分の可能性がります。また、傾斜面のすぐ後方から、深さ 60cm の溝状遺構が見つかりました。これは、石積みの東側（背部側）へ約 5m の地点から、幅 13m 以上の規模で掘り込まれています。箱崎の元寇防塁は、正安 4（1302）年ごろまでは、異国警固のために修理されていた、と『延時文書』に記載されています（九州大学・佐伯弘次教授の御教示による）。石積み遺構が元寇防塁だとすれば、この溝状遺構は、元寇防塁を構築する際、ないしは裏加佐を修理する際に掘り返されています。その後、鎌倉時代末になると防塁は放棄されます。溝出土の 14 世紀代を中心とする貿易陶磁器や土師器、土錘、石錘、銭貨（洪武通寶：初鑄 1368 年）などは、石積みの放棄後に周辺住人たちの生活痕跡が入り込んだものです。

3. 箱崎地区の元寇防塁について

元寇防塁は、文永 11（1274）年の蒙古襲来（文永の役）の後に鎌倉幕府の命により、九州各国の分担で博多湾沿岸一帯に総延長約 20 km にわたって築造されました（図 5）。「元寇防塁」の呼称は大正 2（1913）年の防塁調査の折、中山平次郎氏（元九州大学医学部教授）によって仮称され定着したもので、当時は「^{いしついで}石築地」「要害石築地」とも表現されました。

元寇防塁は、今津地区は大隅・日向国、^{ながたれ}長垂地区は豊前国、^{いさ}生の松原地区は肥後国、^{まいのほま}姪浜地区は肥前国、博多地区は筑前・筑後国、箱崎地区は薩摩国、^{かしい}香椎地区は豊後国が、領主の所領に応じて割り当てられた範囲の築造を分担しました。昭和 6（1931）年 3 月 30 日、今津、今山、長垂、生の松原、向浜、^{ももぶ}脇、^{じきょう}西新、^{じきょう}地行、地蔵松原の 10 地区が国史跡に指定され、昭和 56（1981）年 3 月 16 日に今津地区の一部が追加指定されました。

石堂川（御笠川）と多々良川の河口を結ぶ約 3.3km の箱崎地区を、薩摩国が築造分担しました。元寇防塁の位置については、中山氏が九州大学医学部構内（グラウンド横）から箱崎網屋の墓地、九州大学旧工学部、農学部構内を貫いて地蔵松原墓地にいたる微高地上に立地すると推測しました（中山 1913a・b）。

国指定史跡元寇防塁（地蔵松原地区）では、大正 9（1920）年に全長 4 間半（約 8 m）の範囲を ^{たけやみずき}武谷水城氏が発掘調査しています。石列高は 2 尺～3 尺 5 寸（約 60～110 cm）、石列

幅は2尺～2尺4寸（約60～70cm）、石材は大きいもので幅2尺8寸（約85cm）、高さ1尺（約30cm）、厚さ1尺5寸（約45cm）と報告されています（武谷1922）。平成5（1993）年には九州大学農学部演習農場、平成12（2000）年にはJR鹿児島本線軌道下で、福岡市教育委員会が発掘調査を行っており、ともに元寇防塁の一部とみられる大型の礫が散布する状況が確認されています。

4. まとめ—今回の発掘調査の意義—

- ① 昨年調査した石積み遺構の南側延長線上で、新たに石積みを確認された。国指定史跡元寇防塁（地藏松原地区）の延長線上にあり、博多湾に面して連続的に築かれたとされる、箱崎地区の元寇防塁の一部である可能性が高い。
- ② 石積みは博多湾に沿って南北方向に走る砂州に形成された浜堤の上に造られた。浜堤形成前は、12世紀後半以前の遺物が多数出土する自然の作用による堆積物がひろがっていた。また、石積みの背部で溝状遺構が見つかり、14世紀代を中心とする遺物が出土した。つまり、石積みが造られたのは13世紀代であるといえる。この年代は、元寇防塁の築造年代（13世紀後半）と矛盾しない。
- ③ 溝状遺構は、石積みの背部を構築ならびに管理・修理する際に掘り返された可能性が高く、構築・維持管理上、石積みと一体化していたと考えられる。溝に埋まる遺物群は、石積みの放棄後に周辺住人たちの生活痕跡が入り込んだものである。
- ④ 石積みが造られた時期の浜堤と浜辺、汀線を復元し、石積み築かれた当時の景観を再現できる展望が得られた（図2）。石積みは元寇防塁である可能性が高く、防塁の構築・管理・放棄にいたる一連の過程を復元できる成果が得られた。博多湾沿岸における元寇防塁の調査では、初の事例となる可能性が高い。

参考文献（五十音順）

- 井上麻子 2008「博多の元寇防塁」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎（編）『中世都市・博多を掘る』海鳥社、48-51頁
- 大塚紀宜 2013「元寇防塁と博多湾—防塁の構造とその戦略的機能について」『新修 福岡市史—特別編』自然と遺跡からみた福岡の歴史 福岡市、302-317頁
- 九州大学埋蔵文化財調査室 2016a『箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス中央図書館前南地点 現地説明会資料』（<https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/topics/view/1119>）
- 九州大学埋蔵文化財調査室 2016b「箱崎遺跡の発掘調査—九州大学箱崎キャンパス2016年度調査の成果と課題—」『平成28年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会、96-97頁
- 武谷水城 1921「多々良以東元寇防塁有無に就て 附香椎発掘の石塁」『筑紫史談』第24集 筑紫史談会、32-41頁
- 武谷水城 1922「多々良以東元寇防塁有無に就ての補足 香椎発掘の石土混塁と地藏松原発掘の石塁」『筑紫史談』第25集 筑紫史談会、33-36頁
- 中山平次郎 1913a「箱崎の石塁」福岡日日新聞6月12・14・16・18～20日掲載（中山平次郎 1984「箱崎の石塁」『古代の博多』九州大学出版会、213-236頁 所収）
- 中山平次郎 1913b『福岡附近の史蹟』九州帝国大学医科大学雑誌部
- 福岡市教育委員会埋蔵文化財課（編）2002「0035 元寇防塁跡第9次調査（GKB-9）」『福岡市埋蔵文化財年報VOL.15 平成12（2000）年度版』福岡市教育委員会埋蔵文化財課、52-54頁
- 堀本一繁 2010「蒙古襲来と博多—元寇防塁の築造と異国警固体制—」高橋慎一郎（編）『史跡で読む日本の歴史6 鎌倉の世界』吉川弘文館、186-211頁
- 山内豊聰・巻内勝彦 1972「元寇防塁構造の土木工学的考察」『九州大学工学集報』第45巻 九州大学工学部、363-369頁
- 柳田純孝 1988「元寇防塁と中世の海岸線」川添昭二（編）『よみがえる中世1』東アジアの国際都市 博多平凡社



図1 調査地点の位置

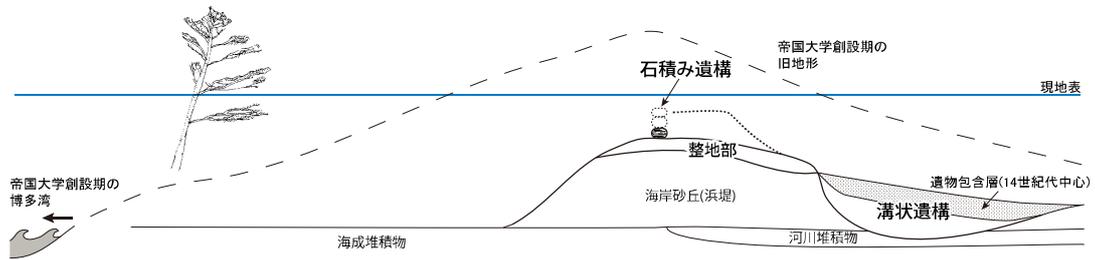


図2 当時の汀線から溝状遺構まで(推定復元模式図)

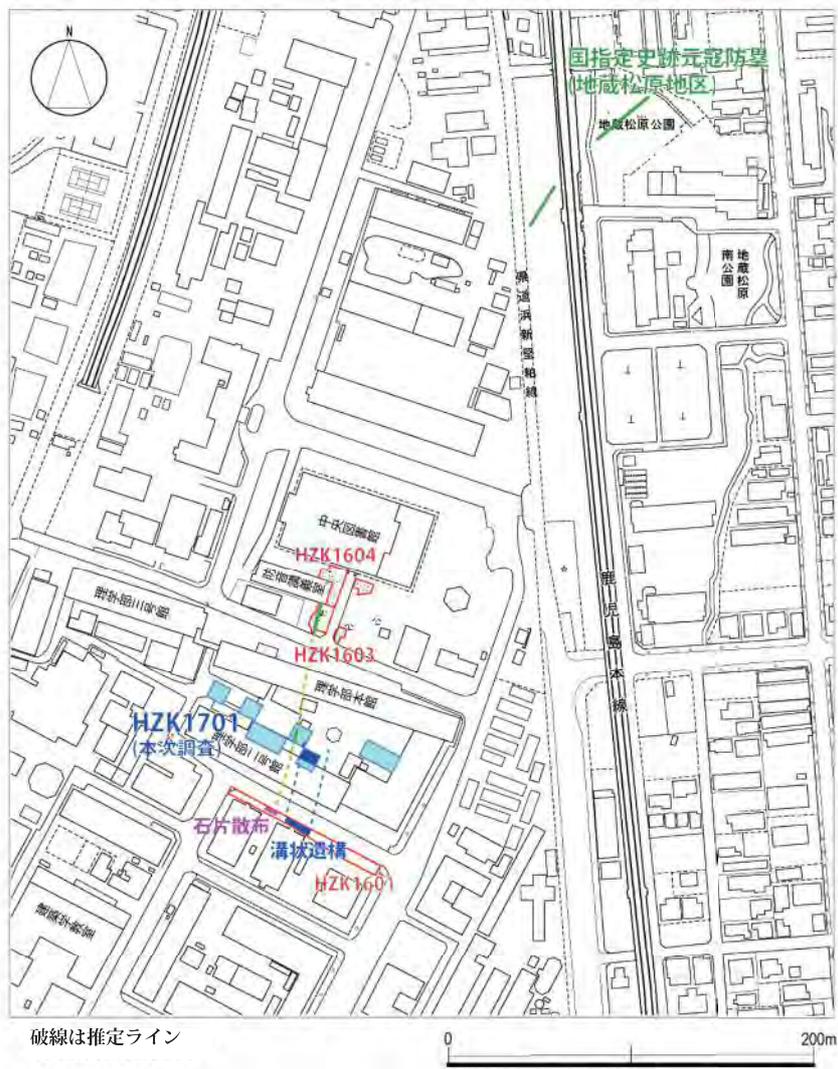


図3 調査地点の位置

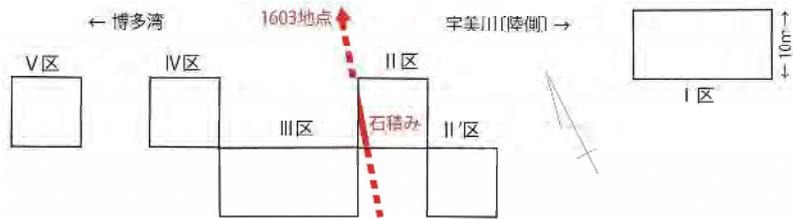


図4 HJK1701 調査区の配置と調査地点の位置



写真1 今回の調査で見つかった石積み遺構(北西から)



写真2 Ⅲ区北壁土層堆積状況(南西から)